

第1回水産教育のあり方に関する検討委員会

日 時 平成21年1月19日(月)
13:30～16:00
場 所 サンラポーむらくも2F 瑞雲の間

教育長挨拶

委員の皆様には、水産教育のあり方に関する検討委員会の委員をお願いいたしましたところ、ご快諾いただきましてありがとうございます。また、本日はご多用の中、ご出席いただきありがとうございます。

ご案内のとおり、昨年10月8日に、本県の水産練習船「わかしまね」が衝突事故を起こし沈没いたしました。当面の善後策としては、生徒実習の円滑な実施や船体の引き揚げ等、鋭意行ってまいりましたが、今後練習船をどうすべきかという問題については、各界のご意見をちょうだいして、考え方をまとめたいと考えた次第であります。

「わかしまね」と同じような船を建造することも選択肢の一つではありますが、私どもは、今後10年間で約1,000人の生徒が減少する中で、魅力ある学校をどうつくっていくかという、非常に重い、大きな課題も抱えております。

また、一方では、景気の後退局面の中で、地域の産業や雇用の場をどうするか、専門高校をどうしていくかという課題も抱えているところであります。

そういう問題も念頭に置いていただき、あるべき島根の水産教育、水産練習船のあり方について、忌憚のないご意見をいただきながら、県の方針をまとめていきたいと思っております。どうかよろしくお願いいたします。

設置要綱の説明

(「検討委員会設置要綱」について資料3により事務局から説明)

会長の選任

(佐藤夏雄委員に決定)

会長挨拶

御指名でありますので、会長を受けさせていただきます。

ただ、この会は、非常に重要で重いテーマを検討していくことになりますし、半年でわずか6、7回というスケジュールで結論を出していくということは、相当のスピードが要求されると思っております。そういう非常に難しい役割を私がこなせるかどうか甚だ自信がありませんが、皆さんのお知恵をしっかりと借りしながら進めてまいりたいと考えております。皆さんから活発に意見を出していただき、しっかり議論して、子供たちがこれから幸せに生きていけるような環境をつくるための、意味のある提案、いい提案ができればと思っております。どうかよろしく願いいたします。（拍手）

議題1 委員会進め方

（資料と議事日程について、次第と資料表紙により事務局から説明）

（検討事項と検討スケジュールについて、資料4により事務局から説明）

議題2 現状説明

(1)わかしまねの衝突事故について、資料5により事務局から説明

<質疑>

○委員

わかしまねの建造費は幾らぐらいか。

○事務局

6億2,900万円である。

○委員

保険でどの程度リカバーできるか。

○事務局

わかしまねの保険上の価値が5億6,000万と積算されており、その範囲内で損害額に応じた保障が出る。

○会長

神海丸とか、練習船の視察は計画されていないか。

○事務局

今のところ設定していないが、どうか、必要か。

○会長

現場を踏まないと生きた話ができないということもある。素人が見ても分からないかもしれないが、そのものを見ずに結論を出したのかと言われるのも不本意である。

○教育長

神海丸が2月16日から24日まで浜田に入港しているので、その間であれば視察ができるのではないか。

○事務局

検討させてほしい。

○委員

現場を見るということはやはり大事ではないか。生徒がどういうところで実習しているかを見ることは、今後の我々の議論の大きな柱になると思う。機会があれば、ぜひお願いしたい。

○会長

できるだけそういう方向でご検討いただきたい。

(2)水産教育の現状と課題について、資料6により事務局から説明

(3)水産業の現場と課題について、資料7により事務局から説明

(4)海運業の現状と課題について、資料8により事務局から説明

<質疑>

○委員

高校求人状況の県外からの求人数を見ると、隠岐水産より浜田水産の方がかなり多い。この差はどこから来ているか。

隠岐水産の海洋生産科資源生産コースの学習内容はどのようなものか。

水産高校に進学するのは隠岐と浜田の中学生がほとんどで、出雲部からはほとんどないが、それは漁法などの関係か。出雲部は水産志望が少ないということか。

○事務局

浜田水産と隠岐水産の県外の求人数の違いについては、まだ十分に分析していない。次回以降のところの説明させてほしい。

○事務局

隠岐水産の資源生産コースでは、栽培漁業の学習ということで、種苗生産や飼育や放流

等を行っている。扱っている魚は、コイやカキ、ヒラメ、金魚といったものである。また、潜水の実習も取り入れている。

○事務局

出雲部の中学生の水産志望が少ないのは、やはり近くに水産高校がないということが大きいと思われる。ただ、出雲部の特定の中学校から、毎年隠岐水産に入学していたり、大田の和江から浜田水産に入って、家の漁業を継いだりといったこともある。

○委員

専攻科がないのに400トンクラスの練習船を持っている県がいくつかあるが、何のために必要なのか。本科と専攻科、乗船経歴、練習船の規模との関係等についても、あわせて説明してほしい。

○事務局

専攻科は、基本的に海技士免許3級の取得を目標にしており、そのためには日付変更線を越えた遠洋航海実習が必要であることから、大型船に乗ってハワイの方まで行ってマグロをとったりしている。したがって、専攻科がなければ大型船は必要ないことになる。

専攻科がないのに大型練習船を持っているところは、かつては専攻科があったが、今はなくなり、しかし大型船は残っているということだと思われる。例えば東京は、かつては大島に水産学科があり遠洋航海実習も行っていたが、現在では海洋国際学科となり、専攻科もなくなっている。大型練習船は漁業に使っているのではなく、ほとんど国際交流の交通手段として使われている。

○委員

当面の措置として鳥取県から水産練習船を借り受けるという話だったが、鳥取県では貸し出すことによる支障はないのか。

○事務局

鳥取県は専攻科がなく、若鳥丸の運航にも若干余裕があることから、2カ月程度借りても大きな支障はないと考えている。

○委員

スポット的に借りるのではなく、将来にわたって通年で借りることはできないか。

○事務局

若鳥丸は、どちらかと言えば県民の船という色彩の濃い船で、水産学科の実習だけでなく、小学生や県民も使っている。したがって、とりあえず来年度の鳥取県の水産学科の実

習には支障ないが、その他の行事には若干影響があるため、未来永劫借りるというところまで話は行っていない。

○委員

資料8に「水産海洋系高校の専攻科修了生が必要と言える」と書いてあるが、これは、この資料をつくるために教育委員会で考えたものなのか、あるいは国土交通省の公的な方針なのか。

○事務局

国土交通省の方針ということではないが、その海事政策に関する計画の中で、船員育成の必要性が述べられていたため、ここに記載したものである。

○委員

資料6の水産学科一覧表の「本科の教育分野」の中に「その他」とあるが、具体的にはどのようなものがあるか。

○事務局

漁業や機関や栽培や色々な分野を広く浅く勉強するようなものが、学科やコースとして設置されているところがある。また、ジェットスキーとかスキューバダイビングとか、いわゆる海洋レジャーを学ぶコースを設置しているところもある。

○委員

そういう他県の例を教えてください。

○事務局

次回、水産高校の教育内容について説明する予定なので、そのときにあわせて紹介したい。

○委員

資料7で、漁船隻数として4, 449隻という数があがっているが、これはどのような船か。

また、最後のA3の資料は、農林水産部で認知された資料と考えて良いか。

○農林水産部

平成15年の漁業就業者が四千数百人であることから、その大多数が沿岸漁業者であり、船を1隻ぐらい持っているということで、こういう数字になった。

最後のA3の資料は、農林水産部のサマーレビュー用につくった資料であり、部長まで了解を得たものである。

○委員

それは恐らくほとんど小さい船で、小型船舶の資格で運転できるような船が多いと思われるが、資格を要する船はどの程度あるのか。

○農林水産部

90数%が、昔でいえば小型船舶の4級で乗れる船であり、普通に沿岸で漁をするには小型船舶免許があれば十分と言える。

○委員

わかしまねが導入された経緯というか、どういう必要性があってこの船が導入されたのか、お聞きしたい。

○委員

千葉とか兵庫から中学生が隠岐水産に来ているということだが、逆に島根の中学生が、島根にない水産教育、たとえば海洋レジャーのようなものに惹かれて、他県の水産高校に進学することはないか。

○事務局

県内から他県のどういう高校に進学しているかという調査はしていないので分からないが、我々が理解している範囲内ではほとんどないと思われる。

○委員

千葉や兵庫から来ている中学生は、なぜわざわざ島根の隠岐までやって来るのか。

○事務局

やはり隠岐という土地の持つ魅力が大きいと思われる。離島の雰囲気とか、周囲を海に囲まれて豊かな自然があるとか…。また、海技士免許の1級や2級に合格しているということをインターネットで知ってやってくるというようなことだと理解している。

○委員

資料6の全国水産学科一覧を見ると、水産高校が2校あるのは数県しかない。島根が古くからの水産県であり、漁業界で求められる人材を育てようということで2校体制になっているのだと思う。

そういう意味で考えると、水産高校を卒業した生徒が乗るような大型漁船は、今県内にどれくらいあるのか。また、専攻科では3級海技士の資格を取らせて、遠洋漁業の人材を育成するということだろうが、県内に遠洋漁業という産業はどれほどあるのか。

専攻科の進路先は、ほとんどが官庁船、商船だが、本科は地元の漁業界に就職しており、

将来、船長や機関長になっていく人材だと思われる。以前は、そういう地元漁業界の要請があり、2校の水産高校がそれに応えるということだったのだろうが、時代が変わる中、今そういうニーズにマッチしてるのかどうか、教えてほしい。

○事務局

専攻科が目指している3級海技士は、世界中どこに行っても、どんなに大きな船でも幹部としてやっていける資格であるが、資格を取った生徒が島根県内で就職しようと思っても隠岐汽船等があるだけである。したがって、専攻科を修了した生徒のほとんどは県外の船会社に就職している。地元の漁業も同じで、3級の免許を持っていても、なかなか活かす場がない。

本科の生徒については、以前は受け入れ先がかなりあったと思われるが、それもだんだん減少し、また水産業への就職を希望する生徒も少ないということで、水産業以外に就職する生徒がかなりいる。仁摩や大田は小型底びきだから、小型船舶という免許を取得して後継者としてがんばっている。

○委員

資料6の就職状況一覧を見ると、水産団体への就職は、求人も含めてここ数年皆無のような状況である。水産関係の団体は、やはり水産高校でしっかり技術を身につけた人に活躍してほしいが、ことし求人したのに応募がなかった。どういう対応をしたら良いのか、良い方法があれば教えてほしい。

○委員

私の会社では何人か水産高校出身者を雇っている。その中には幹部クラスもいるが、海技士免許を持っている者があまりいないので、若くて、免許をとって上に上がっていくような意欲のある人材が欲しいと感じている。

議題3 その他

○会長

検討スケジュールについては、最初に一応の説明があったが、そういうことも含めて今日はいろいろ質問が出た。やはりおおまかなスケジュールでは議論がしにくい。次の回ではどこまで議論し、その次はどこまで議論するという最終回までの検討計画をつくっていただきたい。

それともう1点、今回は第1回目にもかかわらず3名の欠席があったが、これはやはりまずい。全員で議論すべきだと思う。最終的に欠席が一人出たということはあるにしても、全員出席を目指す努力はしていただきたい。そうしないと、この短期間できちんと議論していくことができない。

○事務局

事務局としても全員出席が望ましいと考えているので、そういう方向で日程調整を行いたい。

教育次長挨拶

今日は長時間にわたりまして、まことにありがとうございました。

わかしまねの事故を受けて、急遽こうした会議を開催させていただいたわけですが、そのため、本日は3名の委員にご出席いただけませんでした。今後はできるだけ多くの委員にご参加いただけるよう、鋭意日程調整をしていきたいと思っております。

実は、1月13日に神海丸の出港式に行つてまいりました。隠岐水産と浜田水産の専攻科、本科、それに乗組員と指導教員をあわせて60数名の出港であったわけですが、居室は夜行列車の寝台を一回り小さくしたような狭い空間に4名の生徒が入って、これから2カ月、あるいは2カ月半にわたって、航海実習をするということでした。非常に厳しい環境の中、実習に耐えてたくましくなるわけですが、そうした実習の成果が生きるような受け皿もぜひなければいけないと思ったところでございます。

今日は、多くの資料をほとんど一方的に説明する形になりましたが、これからは委員の皆さまに幅広く深い議論をしていただき、望ましい水産教育のあり方について御検討いただきたいと思っております。お忙しい中、ご迷惑をおかけいたしますがよろしくお願ひ申し上げます。

○事務局

以上をもちまして第1回目の検討委員会を終わります。ありがとうございました。